

家庭—保育所—幼稚園

# 幼児の教育



'9912



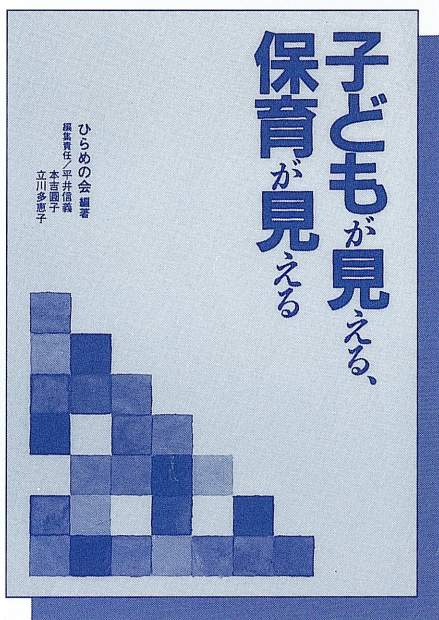
# 子どもが見える、保育が見える

ひらめの会 編著

編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

好評  
発売中

## 保育に花を 咲かせましょう



心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなと感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。

本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。

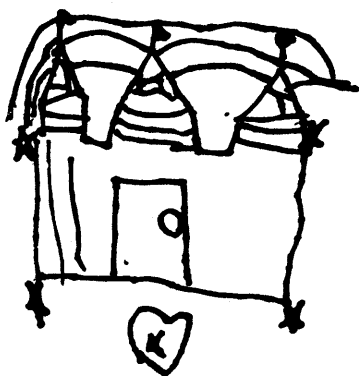
明日の保育を実りあるものになりたいと努力されている方々にお勧めします。

A5判 288頁 定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの  
フレール館

# 幼児の教育

第98巻 第12号

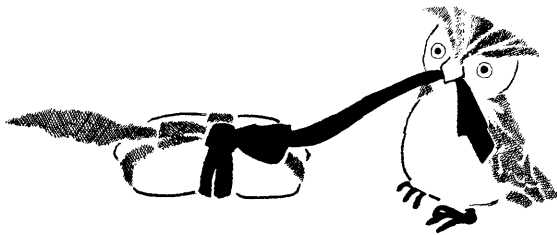


幼 児 の 教 育 目 次

—— 第九十八卷 第十二号 ——

© 1999  
日本幼稚園協会

保育現場からの現代幼児論(5)	戦いごっこ	友定 啓子	(4)
子ども時代と私(18)	三つの思い出	佐々木久春	(12)
鯨岡峻著『両義性の発達心理学』を読んで		浜口 順子	(19)
私が幼児教育を志した頃(2)		津守 真	(27)
幼稚園の日々 二人が力を合わせて		樋口早百合・無藤 隆	(38)



保育者の眼差し——続・担任という視線……………矢萩 恭子…(40)

国防色はもうゴメン……………加古 明子…(47)

子育ての探究 その五

鎌倉・室町時代における子育て……………柴崎 正行…(54)

幼児の教育 第九十八卷(平成十一年) 総目録……………(61)

表紙絵／北村 俊道

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「プレセントの配達」

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子



## 戦いごっこ

友定 啓子

前回まで、幼児の攻撃性の現れを一つの問題状況として記述してきた。

それは、基本的には大人への不信感の表明であると私は見ている。幼児期から不信感を抱かざるを得ない状況に置かれた子どもたちの必死の感情表明であると思える。一言でいえば、「愛されていない幼児たち」の存在である。

「手がかかって憎らしいこともあるけれど、でもやっぱりかわいい」という両義的なわが子への思いが、重心移動して、「かわいいと思えない」という方向にシフトしたときに、それが子どもたちに伝わらないはずがない。ただでさえ、自分の存在に不安な子どもたちがそういう親の思いまで受け止めなければならぬとは、たいへんなことだと思う。不信感を、大人一般に

向けるのも、当然のことだと思う。誰かがどこかで、それを受け止めてやらなければ、子どもたちは人を信じられないと思う。その受け止めは、保育の中でもできるけれど、たいへんな実践力を必要とする。

この構図は、思春期問題と非常によく似ている。良心的な教師たちは、子どもたちの問題行動の陰に必ず深い大人への不信感を見だし、それを受け止め、子どもたちを支えている。

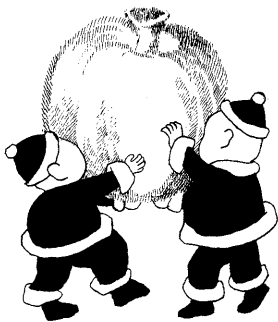
### 「セーラーマンごっこ」の不思議

ところで、話は突然変わるが、私は、幼児の攻撃性の問題を考えるときに、彼らの古典的な遊びである「戦いごっこ」が気になっていた。男児が好んでしている遊びであるが、一九九五年頃の「セーラーマン」の登場あたりから、女児もこの手の戦いごっこをするようになってきている。ただその攻撃性は他愛もないものだというように、女性的なファッションで、

大人にはカモフラージュされている。しかし、子どもたちの勢いを見ると、「美少女戦士〇〇!」というのと「ウルトラマン〇〇!」というのとは本質的に違いはないように見える。もっとも二歳児ぐらいで、年齢が低ければ、あまり性差にこだわらないで、女児も「ウルトラマン〇〇」になったりすることもある。

私は、セーラーマンごっこをとてもおもしろいと思ってみていた。女児たちがどう戦うかと期待していたのである。これも男児の定番五人戦士シリーズと一緒に、複数のヒロ

インが集団で登場するのだった。その当時の女児たちの関心事といえは、「だれがセーラー〇〇になるのか、自分は何か」



ということ、思いが聞き届けられないとよくもめていた。そして「セーラムーンごっこ」で何をやるかといえば、数人が次々と名乗って出てきて、手をつないでポーズを取って一緒に動くというものだった。で、待っていても一向に戦いのシーンは出てこない。突然、誰かが倒れていて、「今、助けに行くわよ」などと言うのだった。その前後にあるはずの戦いのシーンはないのであった。目に見える「敵」が出てこない。あの決めのセリフ「月に代わってお仕置きよ！」は、母親たちのお株をとったようで、親たちには不評だったが、本人たちは意気揚々と使っていたのに。その意気揚々さが私には、空しく響くのだった。私は、女児だってかっこよく戦って勝ちたいのだと思っていたのだ。

### 敵のいない「戦いごっこ」

それを見ながら、そういえば男児もあまり戦わない

など気づいた。武器作りはとても熱心にやって、積み木の基地まで作っているのに、そこから一步も出ずに、通りかかる人をとりあえず仮想敵に仕立てて、武器でねらいを定めるだけで、実際には戦わないのだ。武器作りだけに執心する子もいる。広告の剣を何十本も作って満足してしまう。それはそれで認めるとしても、なんかおかしい、今頃の子どもたちは戦わないのかと思っていたところで、「戦いごっこの研究<sup>(1)</sup>」に出会った。青山学院大学の小林紀子氏の研究である。

ちよつと紹介させていただく。戦いごっこを好む五歳児を一年間観察した結果、「幼児の戦いごっこでは、成員同士は戦わない」ことが、まず暗黙のルールだそうである。子どもたちは、遊び集団は壊れやすいということを認識していて、遊び集団を維持するために、集団外への排他性と、集団内の維持を行っている。その中で、「戦いごっこ」は、遊びの内容として集団のこわれ易さを内包している。戦いが高じて本気になり



かねないからである。それを避けるために、「これは遊びである」というフレイムを、絶えず確認する必要がある。この確認維持が案外むずかしい。

氏は五歳児の観察の結果、戦いごっこにおいては、「会員同士は敵味方となつて争わない」「集団外の幼児とは敵味方となつて戦う」という行動の取り決めをしているということを見いだした。実際に彼らがこのことを公言しているわけではないのだが、それに則つた行動をするというのだ。氏はそれを内的ルールと呼んでいる。集団内部には、戦う相手はいない。ではどうやって戦うか。一つは、「架空の敵を想定する」、あるいは「一人二役となつて戦う」などである。どちらもストーリーを自分のコントロール下におけるという

わけであり、なるほどと思わせる。この他に、「不戦のエピソード」と言われているが、会員同士が戦うという状況が発生したときに、①「けんか」「修行」「試合」などと言って、状況を変換したり（つまり、これはふりであるという再確認）、②戦わない役（ヒーローが、変身前の日常の姿などに戻るなど）に役割や役柄を変換したりして、「会員同士は戦わない」ことを維持しているというのだ。

なるほどと思ひ当たることがある。そして、かれらは「自集団以外のもの」とは敵味方となつて戦うのである。自集団に仲間入りを希望する相手を敵と見なし、一丸となつて戦うこともある。私がおもしろいと思つたのは、他集団を敵として戦う時に、あらかじめ勝敗を決めて戦うという事例である。まともな戦つて勝敗を決めるのではなく、勝者は勝者の「ふり」をし、敗者は敗者の「ふり」をするというのである。しかも、その



ストーリーは敗者役が描き、遊びの流れを作っていたという。

### 攻撃のコントロール

実は、この前がある。私たちの研究会でも、「戦いごっこ」を取り上げていた。ある時、二歳児の戦いごっこが報告され、子どもたちはどれくらい力なら相手が泣かないかを加減しながらやっていることが保育者にはわかったという報告があった。おまけに見える子どもまでが「やさしくやらんといけんよ」と声をかけていたという。保育者が側にいるという条件はあるものの、それを聞いた三、四歳児クラスの保育者は、「三、四歳は、遊びのつもりがつい本気になってしまって、トラブルが多いのに、どうして二歳児でコントロールできるのか」と驚いた。いろいろ話し合っているうちに、二歳児では、遊びの主眼が、「勝負」ではなく「変身」だということに気づいた。つま

り、勝負をして勝つというヒーローの特性に関心があるのではなく、ヒーローに変身すること自体に興味の中心があり、それでコントロールが効くのだというわけだ。つまり「ウルトラマンティガ！」と言って、ポーズを取るだけでうれしいというわけである。変身ベルトでニコニコするようなものである。

その後成長につれて、それにヒーローの特性である勝負という内容が加わって、トラブルという新たな問題が出てくるのかもしれない。この辺は、よく観察してみないといけないのだが、小林氏の三―五歳の継続観察<sup>2)</sup>においても、このトラブル回避が「戦いごっこ」の子どもたちの重要な影のテーマのようである。彼らは「相手との関係が壊れそうになると、相手の身体に触れないようにしたり、スローモーションにするなど、『戦いのふり』の攻撃性を弱める」「仲間が戦ってどうする」と言うなど、相手を敵と見なした『戦いのふり』をやめる」「やられたふりをするなど、互い

に関係を壊さないような『戦いのふり』をする」ことで遊びを維持しているという。

子どもたちは、「戦いごっこ」の中で、お互いに、直接対決をしないようにしているといえそうである。攻撃遊びの中で、攻撃のコントロールを必死で行っているといえる。

### 仁義なき戦い

このように、子どもたちは、自分たち同士では、相手も自分も傷つけないように、直接対決を巧みに避けるために、必死の努力をしている。しかし、その姿と、大人たちにかかってくる姿はあまりにもかけ離れている。

ずいぶん昔のことだが、保育園にお父さんがわが子を送って来た時、どういうわけか別の男の子がちょっかいを出していったことがある。そのお父さんは、それを受けて立ち、正々堂々と戦うことを伝えようとし

て、「やるならこい」と子どもたちに向かった。しかし、それに挑発された子どもたちの何人かは、後ろに回って、お父さんのズボンに手を伸ばし、ずり下げた。お父さんは正義の虚をつかれた感じだった。

今もこれと同じ光景がある。成人男性に対して、手段を選ばないようなところがある。女の人の場合、胸元に手を入れられたりする。髪を引っ張るなんていうのもよくある。大人でも危ないと思う武器を持つてくることがある。大人は正義をと思っけていても、子どもはそんなものは完全に無視し、その裏をいき、的確に大人の急所をつく。大人の方は自分が優位だと思っけてるので、これにはあわててしまう。

なんだかここで、大人の「勝負」のイメージと決定的に違うものを感じてしまう。我々大人にとって戦いとは、何かを決するための最終手段である。正当な防衛か、正義を実現するために、悪を懲らしめるための必要悪としての攻撃だと、我々大人はとりあえず考え

る。だから攻撃をしかけるには、その正当性が問われるわけだ。そうでなければ、対等性を問題にする。やるなら一対一というわけである。

私たちは、「戦い」なら、正々堂々とやれ、と思っ  
ているが、彼らは決して互角の戦いはしない。負ける  
かもしれない戦いはしない。勝てると思うものだけや  
る。それはちよつと気弱なお姉さんだったり、蹴つて  
もしかられそうにないおばさんだったり、自分たちを  
抑圧しないちよつと変わったおじさんだったりする。

そして、もう一つの問題は、一人の行動が別の子  
どもたちの同じ行動を引き出してしまふということ  
だ。それに子どもたちは一対一では決して勝てない  
ということを知っている。

とすれば、戦いは正々堂々と、という感覚はもしか  
したら大人の幻想ではないかと思えてくる。それは戦  
いを正当化するための理論であつて、そういう戦いだ

けは認めるといふ留保  
条件で、ひよつとした  
ら特殊な「教育的幻  
想」ではないかと思え  
てくる。

子どもたちは、欺瞞

的な正義を教えようとする大人・子ども関係をす  
り  
と抜けて、大人との本音の関係を生きようとしてい  
る  
かも知れない。大人には、子ども集団内部で働か  
せ  
ていたような、コントロールは使われないし、使えない。  
それは、まさに大人にそうされているからだと思  
え  
てならないのである。大人に対する不信と依存が  
仁  
義なき戦いを幼児にさせていると思う。

私は、幼児との戦いごっこは断ることにしている。私  
の  
ような、自集団外の人間は、必ず悪者にされるから  
である。学生たちも、よくやられている。学生たち



は、「ごっこ」「遊び」という形で誘われている。気軽に引き受けて、学生が、「遊び」だと思っていると、とんでもない目に遭わされる。学生が手を縛られて、うずくまっているので、「どうしたの?」と聞くと、「捕まって刑務所にいれられてるんです」などと悲壮な声で言っている。それでも時には、見かねて助けられる優しい子どもがいたりして、感激したりしている。「子どもを甘く見ないでね、愚かな大人をやっつて、子どもに間違った行動をさせたり、意味のない自信を与えないでね」と話をしている。もともと、あまり効果がない。やられていることはいやなことでも子どもたちに相手してもらえただけで、うれしい人たちのだ。ここは私の課題だと思う。

「戦いごっこやろう」と誘われて、断るときの一番のセリフは「いいよ。私が〇〇マンで、あんたは悪役ね」と言うことだ。「じゃ、いいよ」と苦笑して相手を引き下がる。どんな理由があろうと、変な行動は

とらせたくない。彼らは、強いようで弱い。見かけの強さにひきずられずに、その奥の思いを見通して、じつくり遊び込めるように、その子の思いが建設的なものに向かつていけるように、つきあい支えてやれたらと思う。

(山口大学)

- (1) 小林紀子「幼児の『戦いごっこ』において成員同士が戦わないことの意味―遊び集団の凝集・維持と遊びの流れ」日本子ども社会学会第三回発表論文集(一九九六)
- (2) 小林紀子・無藤隆「『戦いのふり』にみられる身体知」日本発達心理学会第八回発表論文集(一九九七)

## 三つの思い出



佐々木久春

### 兄のこと

開戦の昭和十六年十二月八日は、紀元二六〇〇年の奉祝の翌年で、世の中全体に、ある種の高ぶりがあることを子どもながらに感じていた。だから昭和十七年の元旦に両親、兄と、家の裏山の愛宕神社へ

参拝した折の両親の、いやに真面目な緊張した面持ちを今も忘れられない。

昭和十六年は兄が中学一年生だからまさに軍国少年で、五つ違いの私は小学校二年生、軍国少年第二世代とでも言うところであつたらう。真珠湾攻撃の映画に興奮し、日本人をいたぶるペンチを持っていた

かつい目鼻、紅毛の鬼畜米英のポスターにおののいた。

昭和十八年六月、兄は仙台一中三年生の時に、憧れの少年航空隊に入った。十五歳の少年は、目を輝かして同期入隊の少年たちと仙台駅前広場からプラットホームへ入っていく。見送り人は近づけないままに我が子、我が兄をさがす。少年たちの中に我が子を見つけた母は私に、ああハンカチを忘れてきた、これをと行ってちり紙を手渡した。遠くになって行く兄に白い紙を夢中になって振る母に、私はとても深い悲しみというものを感じた。

昭和十九年戦況は厳しく、土浦にいる兄に面会することはできなかつた。しかし、その手はあつて、はがきの欄外に黒点をつけて何月何日何時という暗号で親子四人は郷土の先輩だったT分隊士の借りていた家で首尾よく会うことができた。二回目もその

手を使ったのだが、あいにく会う日の朝に空襲警報が出てその日は会えなかつた。土浦の駅で帰りの夜行列車を待つのは長く感じられた。駅のベンチに横になっていた私は怒声に目を覚ました。少国民ともあろうものが人々の面前で寝るとは何事か、という海軍士官の声であつた。もちろん十一歳の少年は飛び起きたが、いったい何故少国民が駅のベンチで横になっていけないのか、今もってわからない。父も母も何も言わなかつたし、周囲の誰一人、何も言わず粘土細工のようになっていたことは、印象に残っている。私が背ばかり高くせん病質でひよろひよろしていたのが士官の目には気に入らなかつたのかもしれない。

#### 小学校落第生

私は小学校を七年やった。病院では初診の先生

が、おう見事な体格だと笑うほどであった。母の、女だけの姉妹五人中もつとも年かさの子であった兄は、親戚の注目を浴び、可愛がられる代わりに、父の教育も厳しかったようだ。病弱ということもあつたかもしれない、小学校に入つてもしょっちゅう寝小便をして私は父の期待と鞭の圏外にあつた。帝国大学を苦学して卒業し婚に入つて図書館司書をしていた父が、夕食後兄に夜遅くまで勉強を教えていたその傍に蒲団をしいていつも私は下から兄たちの顔を見ながら眠りに入つた。

五歳のとき祖母の家に遊びに行つていて、犬に追いかけて腰を打つということがあつた。学校に入つて寝違えて腰が痛く立てなかつたときに、家人はあの時の腰の「うちみ」のせいだ、と言う。それ以来学校に行きたくないときはだいたいこれが役に立つた。いわゆる不登校児だったのでらう。のんび



りしてたいていのことは放任主義だった母が、この何か理由をつけて休もうとする事に対しては厳しかった。玄関の外へ、表通りへ、ほうきをもって追いかけてきた。

これは母の都合があつたかもしれない。私が学校に上がる前、母は午前から私を連れて出かけた。遠回りして途中「えちゃ」と言うところに寄つた。お茶を買つたのだな、と思つた。そして活動写真を観て、何か食べて帰つた。これは父や兄に黙っているように、と言うことで約束は固く守られた。「えちゃ」は、高校時分になつてわかつた。ワ行の



「彖」と思ったのは「志」の行書体だったのだ、「ちゃ」という拗音は戦前のこととて「ちや」と書いて「ちや」とも「ちゃ」とも読んだ。また、母の行動は、泥酔して一夜にして月給を使い尽くした酒癖の悪い父への腹いせであったことは、のちに母が話してくれた。

話はやや横道にそれたが、四年生のときジフテリヤが原因で（どうも医者 of 誤診だったようだが）通院し、なおつてもその後はぶらぶら過ごすことができるといふなんとも嬉しいことになった。ふだんは寝ている。週に三回ほど医院に行く。小学校はの上まで二十分ほどかかったが、医者までは反対の町のほうへ三十分以上かかる。学校とは逆のほうへ、朝日を浴びて行く、帰りは夢多い模型飛行機屋、何でも見られる本屋、じいさんが巧みに歯を入れる下駄屋など、たっぷり時間をかけて見て、家に帰れば

床におさまり昼のことをうっとりと思い出す、という楽しい日々を送った。

そして、昭和二十年になった。三月、父は旧制山形高校時代の友人が父の故郷である山形県の開拓農場に勤めていて、その学科を引き受けてくれないかということ、仙台も戦雲怪しく、子どもの健康、日々の糧食等を考え疎開ということになった。

仙台市向山小学校から山形県北村山郡亀井田村（現大石田町）の小学校へ転校して五年生をもう一度やった。

### 山形疎開

とても快適だった。何でも分かるのだ。急に秀才になってしまった。五年生はほとんど学校に行っていないなかったのに、この年頃の一年の自然成長は大きかったのだろうか、繰り返ししの五年生は何でも理解

できた。転校先の校長先生は六年生でもいいですよ  
と言って下さったのだが、父は早生まれですからも  
う一度五年生をやらせてください、いいな久春、と  
いうことで六年次五年生の秀才生活が始まったの  
だ。

亀井田村は大石田町に隣接し、最上川をはさんで  
東西に集落が散在する。私の住んだ海谷（かいや）  
に本校がありその南が岩ヶ袋、北が鷹巣、本校に通  
う。一学年合わせて五十人ほどのクラスであった。  
これら三集落は奥羽本線と最上川の流れにはさまれ  
て南北に連なる。川向かいに川前、大浦等、その向  
こうの大高根の山中にもう一つの次年子（ずねご）  
の集落があつて、村はいくつかの分校を持ってい  
た。

大石田は、後に思えば古くは奥の細道芭蕉ゆかり  
の地であり、私が疎開していたそのとき斎藤茂吉が

住んでいたのであつた。

夏は猛烈に暑く、冬は雪が二メートルほど積も  
る。疎開の当初は農家の小屋の二階が座敷になつて  
いて、そこに住み二箇月ほど経つて公舎に移つた。

そこは、村人もあきらめた原野で、福原村に接する  
亀井田村の東側にあつた。大高根修練農場とセット  
になつていて、修了した紅顔の少年たちは満蒙青少  
年開拓義勇軍の持ち駒になつた。その大もとが加藤  
完治の内原訓練所であることは、後で知つたことで  
はなく当時私が確か知つていたことだと思われるか  
ら、高らかに喧伝されていた事なのであろう。



その原っぱから独りで学校に通うのは、とても好きだった。仙台の病院帰りの街をぶらぶらするのと同じ感じだった。ただここは美しかった。冬、かなたに鳥海山と月山が見え、広大なしやしやしい茜色のパノラマをつくった。晩い春に芽吹いた唐松林が続く。少年にもものつびきならない美の陶醉を迫った。梅雨の頃に原野の道端にどうしてできたか知らないが芝のくぼみにいくつもいくつも水溜まりができる、そこにそれぞれ思いを込めて木片を削った舟を走らせる。遠いかなたへの、それが何かはわからないが夢が広がっていった。山形の盆地の夏はいやだった。犬のようにごろごろしていた。秋は食べ物があって大好き。そして冬が来て、毎日「長靴スキー」をした。

この生活で私にはもう一つの生活様式が生まれた。独りぶらぶらの良さもさることながら、しだい

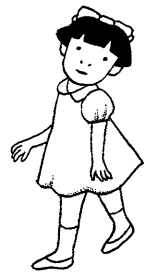
に子ども集団の行動もたのしくなってきたのである。三集落から通学する児童は、自ずと三集団をつくっていた。ガキ大将以下、いじめられっ子まで、役割の分担がある。その中で、この新入り秀才は新しく設けられた海谷集落の知将として別格の地位につくことができた。これまで味わった事の無い、甘味があった。

冬、降り積もった雪も二月過ぎには表面が溶け、夜のうちに凍る。それを堅雪（かたゆき）というが、こうなれば晴天の日でも午前十時位までならどこまでも行ける。スキーをはいて、林の木の幹の周囲が溶けて地表までウロになった所に野ウサギが潜んでいるはず、ウサギへめ（「へめる」は、捕まえるの意）にでかける。春過ぎには木々にヒワが巣をつくり卵を生む。ヒナが孵った頃、木に登って巣ごとヒナをいただいてくる。めいめい缶詰めの空き缶

に、とって来た巢を入れ、口をしぼれる布袋に入れて、学校に持って行って休み時間にすり餌を与えては、見せ合って自慢する。そのほかザコへめ、タニシとり、水浴び等、遊びの種は尽きない。

また、学校が畑と田んぼを持っていて、一通り農作業をやった。畑の収穫でイモ煮会をやるのも楽しかった。軒の高さまで雪に閉じこめられるので五箇月分の木炭を、中学年以上の児童が皆ミノを着て、最上川を渡り、遠く大高根山中の次年子の集落まで運びに行く。

こんな事をしていくうちに、ひよろひよろ、せん病質の少年は、丈夫になっていった。昭和二十四年春、仙台の中学に戻るまでには体力もついた。秀才も仙台に戻ればみじめなものだったが、復員して復学した兄の特訓に泣きながら頑張ることのできる気力と体力がいつのまにか、そなわっていたようであ



る。父は要領悪く、県が変われば恩給をもらう為の、勤務年数が途切れる事も知らなかった。何も残してやれないが、おまえには丈夫な体だけは残せたと思う、と晩年酔えば父が幾度となく口にした言葉だが、私もまったくそうだと思っている。

(秋田県立大学)

鯨岡峻著

『両義性の発達心理学』を読んで

浜口 順子

ああ面白かった。鯨岡さんは心理学の人だけど保育のひだひだがよくわかっておられるのだなあ、とというのが、読後の率直な感想。B5判全三七〇ページのやや重厚なこの本だが、ピンク基調のポップな表紙（Nario TAITENさん装丁）の明るさに助けら

れて読み始めてみると、意外と読みやすく引き込まれていった。

『両義性の発達心理学』（ミネルヴァ書房、一九九八年）は、今年の日本保育学会文献賞を受賞した。この本で著者は子どもと養育者の関係に影響を及ぼ

し及ぼされる者——参加観察者——として研究する立場をあえて堅持し、豊富な観察資料を駆使して、保育的關係のひだに隠れたさまざまな問題を「両義性」という視点から提示している。「心理学の人」という言い方はもはや時代錯誤的なのかもしれないが、学際的な広がりを構想せざるをえない保育学界にとつて、この新しい発達心理学は歓迎すべき歩み寄りとして「映った」はずだ。

そう、この「映る・映す」という言葉が、しばらく癖になりそうな予感がある。鯨岡氏は近々「関係発達論序説」の上梓を予定されているということだが、氏の言う「関係」とは向かい合わせに置いた二枚の鏡が「映し合う」イメージに由来している（メロロ・ポンティの使った比喻）、関係の中で示される二者の姿は相手のあり方の「映し返し」であると繰り返し論じられている。私がこの本を「面白い」と思ったのも、私の保育観を映しているからなの

違いない。

この著書は全四章から成り立っている。まず第一章では「両義性の発達心理学を指して」と題して、「両義性」をキーワードに子ども

と養育者の關係のあり方が論じられ、それを踏まえての世代間リサイクル的生涯発達論の素描がある。

「両義性」には幾つかの次元があつて、人と人が関わるるときそれが複雑にからみあうことになるが、その中の「根源的両義性」という人間存在の抱える根源的な矛盾についてまず論じられている。これは他者のなかに投げ出されていながら自己に収斂するといふ、「緊合希求性」と「自己充実欲求」の間にあるものだ。自他の共軛性とも言われる。もちろんこ



これは子どもの側にも、大人の側にもそれぞれの存在

に内在している両義性である。しかし子どもの場合、乳児期初期には「他から分立した自己をいまだ語り得ないほどに、その自己の輪廓は不明瞭」であるために両義性の双翼は「ほとんど重なり合っている」。乳児期後期から「行動能力の伸長とともに自他のあいだに裂け目が生じ」、自分の「思い通り」が養育者との間ですんなり通らない「捻じれ」を経験するようになるという。「捻じれ」はこれ以後人間関係のなかで繰り返し体験されていく。「捻じれ」という言葉は本書を通じて十数箇所に見られる概念で（索引が便利だ）、欲求が真っ直ぐ実現されず矛盾を体験する状況のことを指しているようだった。そのネガティブな響きとは相対して、捻じれ自体が（適度な強さに働けば）他者との関係性が両義性の間で硬直することを防ぎ、現実の中で動きだすエネルギーの役割を果たしており、自己の発達に不可欠

なものだと理解された。

根源的両義性が人間存在の抽象的でありかたから発しているのに対して、子どもと養育者が共に生きる場で問題になるのが「存在両義性」である。この両者は、相手方を存在理由の基盤にしているという意味で特殊なのだ。子どもは、子ども状態を脱出したいというベクトルと子どものままであるろうとするベクトルを両義的に合わせもつ上に、前者の中には大人への「反発」と「同化」欲求という矛盾を孕んでいる。後者の中でも、庇護され続けようとする思いと大人の世界への反発とが混在している。養育者の側ではどうかというと、「子どもへの同一化と反同一化」「社会通念としての養育動向への同調と非同調」そして「自分の親への同一化と反同一化」という矛盾を養育行動のなかに両義性として抱き続けているのだ。養育行動が社会通念および文化的な価値観を映し出し、さらに子どもとの間で受容と反発



という両義性を孕みつつ、文化の世代間リサイクル（教育）が生まれるという論は、ランゲフェルトの教育論に通底すると思つた。ランゲフェルトは教育を子どもによる意味の再構成過程とみており、遊びは付与された社会的意味を子どもなりに理解しなおし自分のものとしていく行為ととらえる。鯨岡氏は、そこに「自分の親」との関係をより具体的なファクターとして絡み合わせ、そこから複数の両義性のしがらみのなかで展開される『人間Ⅱ育てる者』への発達論を予告している。次の著書が楽しみである。

第一章の最後に、関係発達の方法論として観察およびエピソードの記述の問題が取り上げられている。「関与しながらの参加観察」を、従来の発達心理学がとってきた客観的観察態度と「同時に」必要方法とし、それを恣意的に主観的だとする批判にもちこたえるためには、「メタ」的な二重の行為を

重ねることが重要であるという。つまりかくのごとく見え、感じたと言語を観察・者をとらえた上で、それを「図」とさせている「地」の枠組みを見、感じる「メタ」的な態度である。さらに観察者を観察するスーパヴァイザーとしてのメタ観察者の必要性も示唆されている。記述方法も必然的に初次的なものから、一日の流れを客観的に羅列したもの、間主観的な印象を加味したもの、「素朴理論」を差し挟んだものへの「メタ」的な眼差しを重層化していくものとなる。この過程は、日常的な保育参加者が少しでも日常性を超越した視点を求めて、「想起」——「言語化（メモ、記録、話し合い）」——「解釈」などの一連の作業を日々の実践のあい間に差し挟んでいく営みとよく似ていると思う。<sup>11)</sup>

第二章「養育の場の両義性と原初的コミュニケーション」では、一歳から一歳半直前のY君とその母親の家庭でのやりとり（前著『原初的コミュニケーション』





シヨンの諸相」へミネルヴァ書房 一九九七）では、Y君の誕生から十一カ月過ぎまでの親子関係が取り上げられている）から十九のエピソードを抽出し、この時期になって一層すすんでくる親子の分かりあいについて読み解く。従来よくいわれてきた記号の伝達・交換という意味での「言語理解」の発達というレベルではなく、子どもの「思い」の明確化とそれに伴う力動感(vitality affects)の増大、そして養育者がむける「いつも、すでに」の関心の向け方などが、「子どもの言いたいことがわかりやすくなっ」てくることの背景にあると言う。しかしその裏側には、子どもの「主体としての輪廓の際立ち」があって、養育者は単に「受け入れ、支え、認める働きかけでは不十分になって、そこに教え、導き、制止を加えることが必要になって」くるという矛盾的状况（「捻じれ」）を子どもも養育者も生きることになる。

第三章「保育の場の両義性と原初的コミュニケーション」では、保育園や幼稚園での観察をとおして、認め・支えることと教え・導くこととの間にあつる両義性、ひとりひとりを尊重することと集団性の確立の間にある両義性、子どもの自発的な遊びと保育者の「映し返し」、「気になる子ども」をめぐる保育者と子ども・他の子どもたちとの関係などについて論じられている。これらの問題は、現場の保育者が日々迷いつづけ問いつづけている両義性の代表格ばかりだ。たとえば二階のテラスからプラスチックの積木を落として遊ぶS君（障害のある子ども）の「いま、ここ」を大切にしたい保育者が、他の子どもに「どうしてS君だけいいの」と問いつめられて、「……そのうちみんなのように言葉が分かるようになったら、二階から投げなくなるよ」と苦しませるに説明していくと、子どもたちが結局「じゃあSちゃんは特別なんだ」と納得した、というエピソード

ドは考えさせられる。この記録を平面的に見ると教育的な間違いも矛盾もないと思う。しかし読んで感じるこのやりきれないようないろいろな思いの錯綜は、保育について一定の理解があり記録中の保育者に「成り込み」のできる人ならば実感するもので、これこそが保育者が日常的に住み込んでいる両義的なムードなのだと思う。保育実践中の「思い」が単義的にすっきりしていることなどほとんどないのではないか。「引き裂かれる」ような両義的な迷いが充滿している。かといってそれは必ずしも居心地の悪いものではない。むしろそれが保育者の心に漂う基本的なムードであって、鯨岡氏のいう「いつも、すでに」のメタ水準の関心の下地になっている。そして、そのムードを醸し出す端緒らしきものを分析していくと「両義性」ということなんだ、という説明に達するということかもしれない。このムードに疲れてしまうと、保育者は単義的になる。つまり迷

わなくなる。したがって、子どもの行為や表現に何が「映って」いるのかに関心が薄まる。子どもが見えなくなる。

第四章 「障害児の育つ場の両義性とコミュニケーション」では、まず、いまを受容することと発達促進的考え方との間の両義性が論じられている。これは「コミュニケーションの障害」が従来、機能不全ととらえられてきたのに対して、気持ちが通じ合えないという関係そのもの問題としてとらえようとする姿勢に通じている。コミュニケーションの難し





さを訴える障害児の親と子どもの問題は、子ども自身の障害それ自体よりも、その障害をめぐって親子がたどってきた歴史の上に現れる。「障害の受容」とは理念ではなく「能動的受容の形をとって現れ」「個人の価値観全体が大きく組み直される」ことによってしか生じないのであり、障害のある子どもをめぐって養育者としての両義的な迷いが「先鋭化」して現れると述べている。「通じ合う」とは何か、「迷い」とは何か、などの実存的な問いが先行することが肝要なのだろう。それを見過ごして、矛盾し合う両義的な二点を切り離して別々の実体として取り扱おうとすると、机上の空論になるのである。

この本全体を通じて「逆転の発想」のトレーニングを続けていたような印象もある。ある一つの事象を論ずるとその裏にあるのは何か、その対立する二項それぞれの中にもまた相矛盾する方向性が……という具合である。保育現象についていろいろと考

えをめぐらす際、問題の本質を明らかにするために「反対側に視点を映して意味をさぐる」という手法は、私自身も自然にとってきたと思う。保育という日常生活の事象の中に生きていけば、それこそグチャグチャなのだ。「保育にはまず混沌ありき」なのであって、それを一刀両断（二つに分けることだ）にしたい願望は常にもちながら、いやそれでは保育の本質を記述できないというジレンマをもっている。

だからこの著書に出会って、この混沌に真正面から向かい合う勇氣と執拗さが感じられて、嬉しかった。（が、やはり現象学なのか、という当然のような物足りないような両義的な気分もある。）ブーバーの「（対応語は）それをはなれて外にある何かを言い表すのではなく、……語られることによつて、存在の存立がひき起こされる」（『我と汝』岩波文庫一九七九、P. 7）と言うのをヒントにする

と、相互補填しあう両義的な概念があつてはじめて

存在を全体的に浮かび上がらせることができるという  
ことであろう。

気になったのは「弱み」という言葉だ。他者存在  
を前提として根源的な欲求充足を調整しなければな  
らないことを、著者はなぜ人間存在の本質的な「弱  
み」と表現するのだろうか。「弱み」でもあるし  
「強み」でもあるという、当然起こるべき逆転の発  
想がこの一点に関して見られず、しかもこの「弱  
み」主張は氏の著書のみならずシンポジウム発言な  
どでも散見される。私などは「混沌相乱れて」とい  
う保育状況に身を置き、秩序ある世界への憧憬を半  
ば抱きつつも、そのグチャグチャにまみれている快  
感の方へ傾斜しているので、自己へと収斂するタガ  
が多少緩んでいるぐあい「ほどよい」と感じるの  
だが、おそらく心理学における「自己・自我」概念  
とは、私の知識や理解力を大きく越えて、不可欠の  
理論的メルクマールであるのに違いない。でなけれ

ば、ご本人がシンポジウムで発言していらしたよう  
に「人間観」の問題なのだろうか。<sup>(2)</sup>

(十文字学園女子短期大学)

#### 注

(1) 拙論「保育実践研究における省察的理解の過程」津守

真・本田和子・松井とし・浜口順子『人間現象として  
の保育研究 増補版』光生館 一九九九年

(2) 日本保育学会第五十二回大会「連続講座Ⅰ実践と研究

Ⅰ ビデオを通してみる実践研究の課題」における自  
由討論の中の発言。(一九九九年五月三十日)



## 私が幼児教育を志した頃(2)

津守 真

### 昭和二十年秋

昭和二十年秋は、日本人の近代史にとって特別な時期だったと思う。当時を生きた人にとっては、戦争に明け暮れていた日々から突然に解放されたが、次の生活がまだはじまらないという中間の時期だった。毎日は食糧の調達に追われながら、真剣に過去を考え、未来を思っていた点は、人々に共通だったと思う。そのような歴史の転換期に、生涯のどの時期で遭遇したかによって、時代の体験の仕方は違うだろう。私は二十歳になる直前で、社会生活の出発点にあった。その後の五十数年を顧みるに、



あの時期に心に深く突き刺さったことがいつも私の心の奥に留まっていて、それを抜きにして私の仕事も人生も考えることはできない。私の父は、敗戦と共に会社を辞めて、それから八十七歳で死ぬまで三十年以上、家においてひたすら聖書を読み、孫たちの相手をして過ごした。父の会社が戦争中に軍の仕事をしていて、父はそれを恥じた。息子は人を殺す仕事でなく、人を生かす仕事をやれと言って、私を励ましてくれた。私にとって何よりも有難いことであった。

### 大学の再開

大学が再開されたらしいと知って（その頃は情報網も不足していた）、私をはじめて大学にいったときには、講義が再開されたばかりで、たしか昭和二十年十月末だった。当時は文学部アーケードに開講科目と教授名が、大きな細長い紙で書いて貼り出されていた。いまでも記憶しているのは、和辻哲郎教授の「世界史の反省」という題目だった。つい半年前の四月には、日本精神史における三種の神器―鏡と剣と玉―について微細にわたる解釈が毎週続いていた。現在の私だったら興味深く読めるのに、その頃のノートは紛失して手元に残念に思う。戦争が終わったとたんに、「世界史の反省」と講義題目が書き換えられたことに、私は釈然とせず、この講義には出席しなかった。いま考えると若気の無思慮で申し訳なかったと思う。



私は心理学科の学生だったので、専ら専門の講義、実験、ゲシュタルト心理学、統計学などが主で、久しぶりに学問的雰囲気にとっぷりと浸って満足だった。多分皆同様に感じていたと思う。毎日のように、復員して来た先輩、同輩たちがカーキ色の軍服姿で教室にあらわれた。昭和十七年頃から学籍はあっても軍隊にいつていた先輩たちが、続々と学園に戻って来た。本屋には書物もなく、神田の岩波書店の前には新刊書が出る日には、早朝から列をつくって西田幾多郎など新しい本を買い求めたものである。教室の窓は爆風で破れたままで寒風が吹き通した。皆外套を頭から被って、学問に飢えたようにノートをとった。何はともあれ、毎日自分のペースで歩いて大学に通う落ち着いた生活がうれしかった。先生たちの外套は軍隊のとは違って灰色だったが、外套に身を包んだまま黒板に字を書かれた。まだ自分の専門が何であるか定まらない時期で、私はドストエフスキーの『罪と罰』や、ニーチェの『ツアラトゥーストラはかく語りき』などを読み耽った。「おお我が魂よ、起き上がるがいい。心の扉を開け。太陽の光に向かって、その窓を開けよ。そして広い世界に眼を挙げよ。我は光に満ち溢れるであろう。——昭和二〇年十一月二十五日日記より」。昭和二十年秋は、多くの学生は解放の喜びに溢れていた。その心の中にあるものは、不満ではなくて、どこに自分の考えの基本を定めるかという積極的な悩みであった。



### 矢内原忠雄講演会「日本の傷を医す者」

昭和二十年十二月二十三日、新橋田村町の飛行会館で、矢内原忠雄先生の「日本の傷を医す者」という講演会があり、夜、私は父と一緒に、この講演会に出かけた。田村町の角の虎の門寄りにNHKのビルがあり、その新橋側の向かいに飛行会館の茶色いビルが焼けのこっていた。たしか、三階の講堂であった。植民地政策を専攻していた矢内原忠雄は、日本の満州政策を批判したために軍部からにらまれ、昭和十一年十二月に東大を追われ、昭和二十年十一月に東大に復帰されたばかりだった。この講演では、冒頭から旧約聖書エゼキエル書三十七章が朗読された。谷に満ちた「枯れた骨」に神の息が吹きかけられると、骨が音を立てて動き、肉がつき皮がついて生き返り立ち上がったというエゼキエルの幻と言われる箇所である。戦死した若者達の骨が野山に散乱しているというのは、当時の日本の現実そのものだった。「骨は枯れ、望みは絶え果てたとき、主なる神はこう言われる。息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ。神の息が入ると、彼らは生き、その脚で立ち、はなはだ大いなる群衆となった。」とエゼキエル書は記す。戦死した人々のみでなく、空襲で、原爆で死んだ人々の骨が満ちていた。この日本の現実の中で、この人々の死を無駄にするのでなく、私共がそれを意味あるものと考えるのはどうしたらいいのか、それは、無事に戦争を生き延びた人々の切実な精神的課題だった。枯れ





た骨が生き返るといふ希望がもてなかつたら生きていかれない、このようにでも考えなかつたら、友人たちの死と積極的に向き合うことはできないのではないかと、私はこの箇所に納得した。その後、私は、今井館聖書講堂で毎週日曜日の午前矢内原忠雄先生の聖書講義に通うことになり、その同じ場所で午後から、近所の子ども達を集めて日曜学校をすることになるのだが、これについては後に述べる。

矢内原忠雄は、「この惨憺たる敗北」「国家の独立の実質的喪失」の原因として、この講演で三つをあげられた。第一は、一九二二年のワシントン条約に違反した満州事変である。正義（国際条約）に反した国家の行動が神からは認される筈はない、しかるに人々はこれをただ利益問題としてしか考えなかつたことが日本の政治が犯した誤りである。第二には、満州事変の少し前から、軍国主義者は、国粹主義的国体論、天皇陛下は神であるという考えを作り出し、それをもって日本国民の精神を圧迫し、それを否定する言論を圧迫したことである。「片言隻句をとらえて不敬罪として処罰し」、「天皇を神として崇める信仰を己れ自身もたずして、他人の思想を圧迫する手段として用いた」。言論問題によつて大学を追放された矢内原の骨身に染みだ体験である。虎の威を借りて自分に都合のよい論を通す、下士官の論理であり、昔から、根強くある日本社会の性格である。昭和二十年には、多くの人はその通りだと思つた。それから五十数年たった現在、同じことが起こっているのはどうしてなのだろうか。



昭和二十年の暮、もう戦争中の灯火管制はなかったが、クリスマスというのに、新橋界隈は暗くて寒かった。目黒駅から家まで殆ど焼け野原の暗い道を、オーバーの襟を立てて、父と語りながら家に帰った。

昭和二十年は、空襲で家を焼かれ、私自身は兵隊に行き、戦争が終わり、そして平和が来た、激動の年だった。十二月三十一日の私の日記には、「苦難に満ちた昭和二十年よ、さようなら」と記してある。苦難の年だったが、その反面解放の喜びをも味わった日本歴史の中で特別な年であった。私自身、青年期にこの年を過ごしたことを思うとき、人間の一生は歴史の中にあることをあらためて認識させられる。

昭和二十一年一月十五日の日記には次のように記してある。「自分はそのまま眠って過ごせる存在ではない。世界の上に立って動く歴史的存在である。この世界の上に確固として立とう。それゆえに乱脈な存在ではない。何かに向かって進む永続的存在である。すべからず然るべく行動せよ。」

### 南原繁総長の演説

昭和二十一年二月十一日、紀元節の日、南原繁が東大総長になって演説があるというので、学生達は続々と安田講堂に集まった。南原先生は、戦時中大学を追われることはなかったが、内村鑑三の弟子であり、『国家と宗教』の著者であり、孤高の学者



として私共は知っていた。南原先生は、東大総長となって以来、式典のたびに講演され、その講演集は、『祖国を興すもの』（帝国大学新聞社出版部 昭和二十二年）『真理の闘ひ』（東大総合研究会出版部 昭和二十四年）として出版されている。いまは黄色くなったザラ紙の書物であるが、その後五十年以上私の机の脇の本棚に置いて来た。たとえ専門の講義に欠席しても南原先生の演説される式典には出席すると決めていた学生は多かった。私もそのひとりである。いま、ザラ紙の講演集をめくりながら、当時の精神的雰囲気を紹介してみよう。

その最初の講演は「新日本文化の創造」と題し、我が国の敗戦と崩壊の後、最初の建国記念の日になされた。演説の趣旨は次のようである。「今日の我が国の破局と崩壊は、軍閥や一部政治家の無知と野心のみでなく、因つて来るところは深く国民自身の内的欠陥にある。それは何かというと、我が国民には熾烈な民族意識はあったが、おのおのが一個独立の人間としての人間意識の確立と人間性の発展がなかった。個人は国という觀念のわくにはめられて、生々の人間性の発展がなかった。」と言う。

第二には、「人間性の発展だけでは不十分で、人間主観の内面をさらに突き詰め、そこに横たわる自己自身の矛盾を意識し、ここに人間を超えた超主観的な絶対精神——『神の発見』——とそれによる自己克服が必要である。

第三には、ナチス—ドイツとの比較である。「ナチスは真正ドイツ精神にとつては



異質なものを含み、本来のヨーロッパ精神から離反している。それに対して、日本は我が国固有の伝統と精神を賭けて戦った故に、その精神自体が壊滅した今、何を以て祖国の復興を企て得るであろうか。過去の歴史に求め得ないとすれば将来に於いて創り出さねばならぬ。」それは可能かを問い、「私は然りと答える」と南原は言う。「まず各自が自分の心に問い、その全人格を集中して真面目に思惟せられよ。余人はどうかであろうとも恰も自分がその責任を有するかのごとく決意せられよ」と。この時期、大学には応召学徒たちが戻り、五年間位にわたる先輩、後輩が等しく同じ条件のもとに学んだ。一般社会でも、軍人は勿論、政界も財界も、年長者の多くが公職追放になり、そのために私の世代は実質的に先輩のいない生意気な世代になったのではないかと思う。

「ボツダム宣言はわが民族の殲滅を要求するものではない。やがて形作らるべき世界秩序に蘇生せられた平和民族として文化と人類に寄与する道は残されている。」と南原総長は結ばれた。戦争という大きな犠牲の上に可能になった新しい道である。この考えがこのときほど広く受け入れられた時代はなかったのではないかと思う。丁度このころ、教育刷新委員会で教育基本法の原案が作られつつあった。南原繁をはじめ、倉橋惣三もその委員のひとりだった。「新日本文化の創造」の思想は委員たちに共有されていたことは確実である。将来も、これを基本にし、これを具体化してゆけばよ



い。

昭和二十一年三月三十日には、東大安田講堂で戦没並びに殉職者慰霊祭が行われた。なぜこの日が選ばれたのかを私は知らないが、南原総長の「戦没学徒を弔う」という演説があるというので、安田講堂は通路まで満員だった。いまだ帰還しない学友達を思い、何はおいてもこの式典には出席したいと多くの学生達は考えたのだと思う。この日、南原総長は特別にゆつくりと、一語一語かみしめるように語られた。私の耳の底にはあの語調がいまも留まっている。この日の演説は、式典の性格からも、紹介するのにやや情緒的になることを避けられないが、これを飛ばして戦後は語れないので、演説を引用しながら紹介することを許して頂こうと思う。(文中、現代に分かりやすく、また短縮するために、漢字をかえたり、文章の一部を抜いて結び付けたところがあることも許して頂きたい。)

演説の冒頭、「今次大戦に於いて出陣したるのみ永久に還らぬ若き同友学徒諸君のため、ここに哀しき記念の式を挙行せんとして、感慨尽くるところを知らない。」と先生は語り始められた。「顧みればこの幾歲月、われわれ国民は何処をどう辿り来たか。混沌錯乱、恰も模糊たる夢の中を彷徨しつゝあった如くである。併しそれにしては余りに厳しき歴史の現実であり……」明治維新の開国以来、富国強兵、国権の拡充の八十年の結末として、何十万という人の死を伴った歴史の審判の現実だった。



「軍閥・超国家主義者等少数者の無知と無謀と策謀さへによつて企てられたただ戦争一途と、そして没落の断崖目がけて国を挙げての突入であつた。」「忘れもせぬ先年十一月学徒一斉出陣の秋、いかに愛國奉公の情熱に燃えて、諸君は勇躍して我らの許を立つたか。諸君は徒に独断狂信的なる『必勝の信念』を以て闘つたのではない。……」

「憶へば諸君のうちには、いよいよ戦地に出発するといつて、倉皇の時の間を我々のもとを訪ねてくれたのも永遠の別離であつた。また諸君が陣中より切々の純情を綴つて送つてくれた書簡に我ら幾たび涙したか知れぬ。我らしばしばその一人一人の名を呼んで天地に訴えたい衝動をどうすることもできぬ。今次の戦争が無名の帥（いわれのない出陣）であつただけに、人間として同胞として転た痛嘆と同情に堪えぬものがある。……諸君はわれらに向かつて語るごとくである。『今にして誰を恨み誰を咎めようぞ。全学全国民心を一にして祖国再建の事業にあたられよ。これわが永世の悲願である』と。……」

ここまで語られて全講堂は肅然として声もなかつた。「諸君のかつて幾度か集まつた思い出多き講堂、別しても先年全学の壮行会を開いてここから出で征いたその同じ場所に於いて、今日追悼記念の式を挙ぐるに当たり、諸君の霊は必ずや帰り来たつて此処にあるであらう。その英霊を囲んで、学園にふさわしく何の宗教的儀式をもたぬ純一無雑な慰霊祭に於いて、不肖ながら自ら祭主ともなつて執り行つた我らの衷情を諸君はきつと酌んでくれるであらう。」「いまわが心の悲しみ拙詠二首挽



歌として霊前に捧げたいと思う。

桜花咲きのさかりを益良男（ますらお）のいのち死にせば哭かざらめやも  
戦いに死すともいのち甦り 君とことばに国をまもらん

親愛なるわが若き同友学徒の霊よ、冀<sup>こねがひ</sup>は饗<sup>う</sup>けよ。」

演説が結ばれたときには、男たちが声をあげて泣いた。

あの講堂を満たした号泣は何だったのか。戦死した友への悲しみも勿論あるが、それ以上のものがあつたと思う。二度とあのような戦争を起こしてはならないとの決意である。どうしてあの時代が来たのかとの問い、日本にだけ通用する哲学―個人的人格の尊厳を考えない思想―への反省など、過去と未来への真摯な思いがこめられていた。昭和二十一年、この後、戦後の第二の時期に入る。

私はこの時代をあまりに直線的に描き過ぎたかもしれない。一人ひとりの心中はそれぞれにもっと複雑であろう。しかし、心の底にはこのような時代を共にした同時代人に共通の心情があつたと私は信じている。その時代が通り過ぎようとしている現在、その時代精神を記しておかねばならないと書き記した。そして私が幼児教育を志したのも、この時代の中でのことである。

# 幼稚園の日々

## 二人が力を合わせて

幼稚園は子どもが一緒になって遊ぶところだ。その関係の原型は二人がかかるところにある。二人は何か一緒にやっている。互いだけを求めるのではなく、いつもまわりの何か面白そうな活動に開かれていく。一人が紙飛行機を飛ばし、もう一方が見つめる。ともに竹馬に乗り、真剣に歩こうとする。向き合ってじゃんけんをする。二人だけの活動であり、まわりにその達成を示すものであり、個の達成感であると同時に、二人の関係を強めるものである。仲良しであり、同志であり、探検仲間である。いつも同じ二人というわけではない。だが、その二人でいる時には二人ならではの関係となる。



◀五歳の男児二人が紙飛行機を飛ばす。ジャングルジムの上は格好の場所。

▶平均台でどーんけつちった(五歳の女児)。



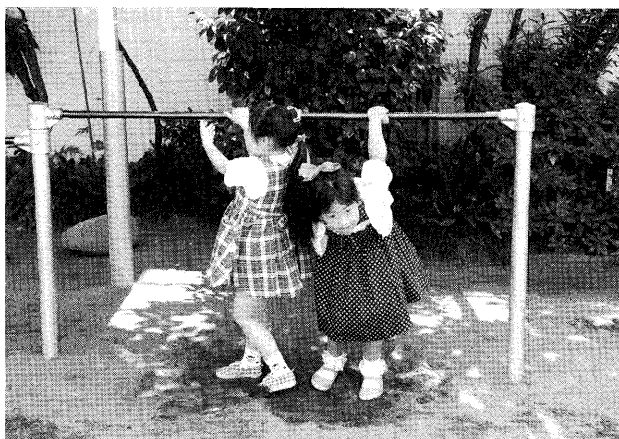




◀ 探検しているの。鳥小屋の裏の方で、柵の向こう下には走っている電車がみえる（五歳）。



▶ 倉庫から竹馬を出して。まだうまく出来ないが、ゆっくり根気よく挑戦する（四歳）。



◀ 鉄棒は技術を要するため年長さんが多いのか？ 見て見て出来るよ、と言われることも多い。

写真・樋口早百合  
解説・無藤 隆  
協力・目白幼稚園

# 保育者の眼差し

— 続・担任という視線

矢萩 恭子

子どもと関わる場を幼稚園に得て、〈担任〉という視線で子どもたちと共にある生活を与えられて以来、それなりの年月が過ぎた。

保育者は、個としての、或いは、集団としての子どもたちと、日々の何気ないやりとりや小さな出来事、心の動き、一瞬の表情、何とはなしに伝

わってくる気持ち、一つひとつを大切に細やかに感受し、それらを自分自身の心で受けとめ表現する喜びと難しさを常に抱えている。

私は、以前本誌でS子という、クラスの中では大変おとなしく、控えめで静かな感じの子どもについて述べた(九十七巻四号)。それぞれが自分な

りに幼稚園での生活を展開できるまでに成長して  
いた年長組のある日にS子が示した行動から、S  
子の内面で起こっていたこと的一端へ自分なりの  
考えを進め、同時に「担任」という立場が抱え  
持っている視線の特徴や、感じたり、経験したこ  
とを《見直す》行為の必要性について言及した。

言うまでもなく、担任は、大勢の子どもの変化  
や成長に同時進行的に立ち合うことになる。集団  
を相手にしながらも、個々の日常を丁寧に見つ  
め、変化を変化として、成長を成長として感じ取  
り、それぞれの子どもと応答を繰り返し、積み重  
ねる。その中で、常に、「クラス」という人間関  
係の型を意識しながらも、その型において個々の  
子どもがそこに慣れ、そこにおいてありのままに  
それぞれを表現してくるところで非常に個人的に  
関係を結び理解を深めようと努力する。考え込ん  
だり、悩んだりしつつも、精一杯生きている子ど

もたちの全存在を認め、ともかくも認め、温かさ  
でくろみ込むようにして、見守り、励まし、注意  
し、そして、時には厳しく叱る。

\*

担任になりたての頃、それは三歳児のクラスで  
あったが、降園準備にかかる為に一人ひとりを保  
育室へ呼び戻そうとして、私はあちこちをそれこ  
そあたふたと駆け回っていた。一人を連れ帰って  
くれば、やっと戻ってきていた別のもう一人が出  
ていってしまいう  
うなそんな三歳の  
楽しいひととき。

それでもようやく  
ほとんどの子ども  
たちを中に入れ、  
K  
園庭を見ると、



が一人、ジャングルジムのてっぺんに登り、一向にクラスの動きなどにはおかないしに遊んでいた。庭靴に履き替え、Kのところへ私が行き、Kとのやりとりを愉快にも感じながら、連れ戻そうと難儀していると、当時の園長が来て言った。

「あなたにはクラスがあるのでしよう。お行きなさいな。」新米の私がどんなに、手間取り、うろたえ、焦り、まごまごしてやっつていようが、私は終始にこにこと無言で、背後からそつと助けてくれていた園長の、この言葉は鮮明に私の心に響いてきた。へクラスへの「担任」ということを改めて自覚した最初であつたと思う。

数年前、Rという強烈な個性に出会つた。飛び抜けて身体が大きく、行動が粗暴で、非常な甘えん坊だつた彼との二年間は、あまたあるクラスの悩みも、成長も、停滞も、涙も、喜びも、感激

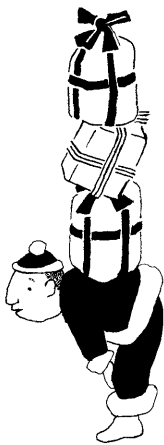
も、Rなしには一日とて語れない日々であつた。

Rの行動は、彼がここからそこへただ移動しただけでも、周りの空気を揺さぶり、そばにいる人や物にぶち当たり、心地よく平和に流れていたそれまでの時間と空間を引き裂かずにはおれない程の、エネルギーとパワーを発散していた。当初の彼は、とにかく世界の至る所、自分の思いに満ち満ちていないと気が済まない傾向があり、その思いのとおりには相手や場面を動かしたので、何かと周りとの衝突が起こり、一旦ぶつかれば、誰一人として（担任さえも）敵う者のいない腕力で、相手を突き飛ばし、ねじ伏せてしまう。または、思いどおりにいかないと、ひっくり返つて泣き喚く。そこら辺にある物にあたる。自分がその一員となつて集団で進めていくべき、生活の流れ（遊びを切り上げて片付ける、お弁当の準備をする、或いは、行事に楽しく参加する……など）

に従うことを嫌がり、拒む。

今でこそ、激しい行動を示していたRの、安心や平衡や秩序を求めて、渦巻き、吹き上げるR自身の内面の叫び、葛藤を、今でもありありと蘇るあの場面この場面を、冷静に捉えることはできない。しかし、当時の自分には、果たしてそれができていたと言えるかどうか。気持ちがあまく興味のあることに辿りつけたとき、一旦取り組み始めると驚く程の集中力でそこに我を没入するRの美しいまでの姿を見、幼稚園に入りたての小さい組の人たちにそつとアリの差し出してやる意外な一面を知ったとしても、そして、Rには、こうやって大人を翻弄し、信頼と安心の手応えを探りながら、求めているがらうまくいかない友だちとの付き合いを何回でも繰り返し重ねていくことがどうしても必要だと実感したとしても、この保育者を抱え込み、引きつけ、振り回し、離さずにはおか

ない子どもの存在に、担任の私は、押し流されそうになっていたに違いない。なぜならば、クラスを見渡せば、遊びが見つからず、心細げに助けを必要としている子どももいれば、友だちとの関係につまずき悩んでいる子どももあり、また、Rと同じように、側にいてくれる大人を待ち焦がれている子どももいたからである。他の子どもたちの様子や気持ち担当である自分の心に飛び込んでくればくるほど、一人の保育者としての力の限界を知らされる。だが一方では、手がかかるからと言って、こんなにも真剣に保育者との関わりを求めている、この一人のひとの《いま》を本気で受



けとめずして、クラスを子どもたちと一緒に作っていくと言えるだろうかという思いもあった。このクラスはまぎれもなくRも含めてこそそのクラスなのだから。こうして、一人の子どもとクラスその他の大勢の子どもたちとの間で引き裂かれる状態を抱えながら、或いは、別のところで進行していた他の深刻な問題にも直面しながら、私は「担任」という役割の現実に向き合わされていた。

同じようなことは、クラスが代わり、クラスを構成する一人ひとりが替わっても、大概同じようにめぐってくる。自分の体力の消耗度こそ違い、Rは、何ら特殊な存在ではなかったがこの頃になって実感される。同じ子どもは一人として存在しないものの、ある特定の場面や状況で示す気持の行き詰まりの類似性や、特徴的な行為の意味に感じる普遍性や、ある危機の次に訪れる変化

の子兆……など、保育のさながらにあって、「この感覚は前にも経験したことがある」と思われる事柄が重なるようになってきた。そして、子どもの自我の成長やアイデンティティの確立に真剣に関わろうとすればするほど、一人ひとりの自我に関わる問題が次々と、或いは、全国の天気分布図のように明滅しては、私の心の中に灯されていない。担任は、その中のどの一つもいい加減にできない代わりに、どの一つにのめり込んでしまっても、クラスは成り立っていかない。

一人の子どもとつきあっているときも、保育者は保育の場の全体の状況を見てとっている。

……

全体の状況を優先させすぎると、抜けがないように見回る保育になって、保育に落ち着きがなくなる。逆に、全体の状況を無視して一人の

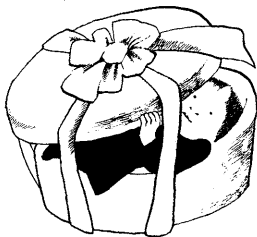
子どもにのめりこむと、関係が他の子どもたち  
に開かれなくなってしまう。実際の保育はその  
中間にある。※

子どもは誰しも特定の大人が継続して温かな配  
慮をめぐらせた生活を必要としている。クラス  
は、その規模の大小は別として、担任という一人  
の大人が複数の子どもたちとその配慮の眼を注ぐ  
場であるから、力の限界は避け難い。私も常日  
頃、担任とは違ったフリーな立場の保育者や、他  
のクラスの保育者に助けられ、支えられている。  
先の園長のように「お行きなさいな」とそっと肩  
を押してくれることもあれば、さまざま状況や  
経過を配慮して、相手の子どもと担任とのつきあ  
いを継続させるために、他の子どもたちをみてく  
れる場合もある。或いは、私たちは互いに、保育  
後の忙しい時間の合間ででも、子どもの話や困っ

ている状態に耳を傾けあうことの大切さを知って  
いる。互いが抱えるへ中間への微妙さ、難しさ、  
外側からは計り知れない眼に見えない状況がある  
ことを知っている。実際、私は、保育のなかで、  
数知れず自分の限界を痛感させられてきた。そう  
やって、自分の限界に立ち合うことで、また新し  
く自分自身を知ることが可能になる。迷い、悩  
み、振り返り、考えるそこから、保育者としての  
また新たな一歩が始まる。

\*

Rとの関わりで  
は、私も様々なこと  
を経験し、学んだ。  
そして、様々な危機  
があつた。Rが分か  
らない。負担だ、か



わいいと思えない、という保育者としての危機も経験した。本来ならば、子どもの為に信頼しあうべき母親との葛藤もあった。父親と対話しようとした試みが逆の結果を生んだこともあった。他の母親からの批判も受けた。親身に意見を述べてくれているであろう職員言葉や態度に動揺し、うな垂れることもあった。怪我が続いてしまい、監視や規制に偏った時期もあった。

何かが劇的に変わった訳ではなかったが、卒園も間近な三学期になって、Rはすうーっと気持ちが悪くなり着いてきた。確かに、激しい癲癇やパニックを示さなくなった。しかし、他方では、同じ行動を余裕をもって見ていられる自分の姿があった。なぜか？ それは大変遅れ馳せながら、この私の方がRをようやく信じられるようになったからではないか。『このままどうなっていくのだろう』という二学期までと違い、本当に心から『R

はきっと分かってくれる』と思えるようになった。また、もう一つには、クラス全体が家族のような関係になり、周りの子どもたちの知恵やユーモアにRも私も助けられて、以前ならば緊迫したであろう場面にも笑いが生まれ、Rの方も、行為そのものは叱られることであっても自分のことは見ていてくれる、好きでいてくれるという確かさを手にすることができ、心の深いところで安心し、心穏やかになれたのではないか。そして、心の深いところで通じあえる何かが生まれたとき、それまで必要としていた《表現》は過去のものとなったのだった。(洗足学園大学附属幼稚園)

※津守 真『保育者の地平』（ミネルヴァ書房、一九九七年）一五〇ページ

◆この文章を、亡き沼館理恵子前園長に捧げます。



# 国防色はもうゴメン

加古 明子

子どもの絵本が、国家意識を高め、戦意高揚のためだけに出版された時代がありました。

昭和に入って、満州事変・支那事変やが大東亜戦争（後に太平洋戦争に）と二十年八月まで戦時体制が続きました。子どもの語は「少国民」と変えら

れ、戦地に対しては銃後。国民総進軍として、子どもも大人と共に闘う一員でした。非常時下、国防色（カーキ色）に染められ、全ての情報は国家が管理し、文化統制・浄化の厳しい波をかぶったのです。子ども向けの文化財も検閲を通るのは、

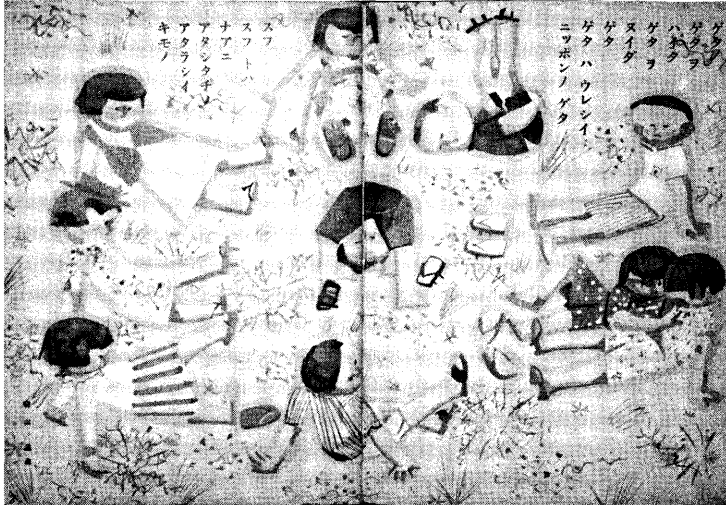
時局認識と忠君愛国・皇国思想色濃く表現されたものばかりでした。

写真1は「標準コドモエ文庫」七年一月 タノシイ アサゴハンです（カタカナ先習）。付録には「ほめられカレンダー」があり、皇国日本を強調した中に、西欧風の生活が描かれています。最近の子どもが見ると、間違い探しの図として、皿の上のナイフ二本・窓から馬に食べ物をやること・パンを胸で切るなど七つも指摘をします。当時、これらの本を手にする幼稚園児（就園率六パーセント）はごく限られた社会層であって、西欧文明に追いつけ追い越せとの風潮があったことがわかります。

写真2は「ワタシハ ランナノコ」十五年十月 物資が詰まってきて、洋風の皮革や絹・綿を廃して日本の下駄やスフ（人造繊維）を推奨する動きにそった頁です。裏表紙に「如何なる苦難にもあくまで我慢強く堪え忍んで行くのは大人の場合で、子ども



▲写真1 「標準コドモエ文庫」 東方書院



▲写真2 「ワタシハ ランナノコ」 幼児標準絵本9 武井武雄詞  
川上四郎装幀 鈴木仁成堂 40銭



▲写真3 「ボクラノ テンチ」 オヒサマエホン3 西田稔監修  
徳永寿美子文 長谷川穂子装幀

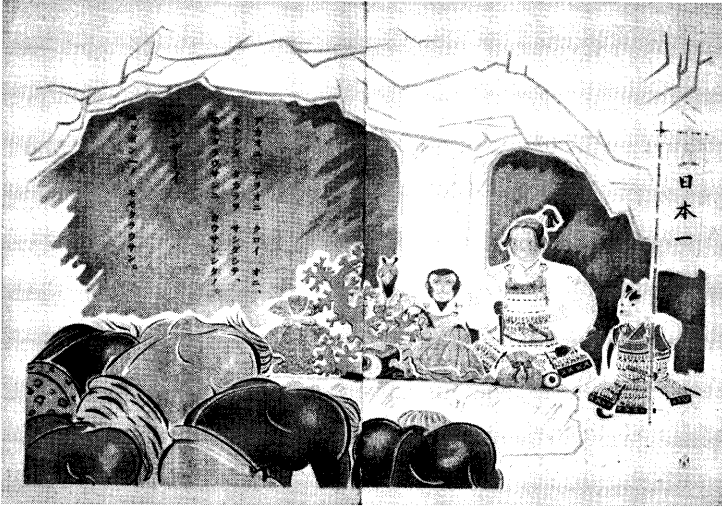
もはもつと積極的に、乏しい生活のなかにも十分な  
 悦びを見いだして嬉々として遊び、満足して育つ  
 でなくては本当ではありません”と武井武雄が説いて  
 います。興亜奉公日・従軍看護婦・慰問袋作りのよ  
 うに参戦意識を強調した遊びを描き、国策標語「お  
 もちゃは 野にも畑にも」「贅沢は 敵だ」を印象  
 づけています。

写真3 「ボクラノ テンチ」十六年四月 “大東  
 亜共栄圏、広い天地へと日に日に発展し、これらの  
 国々の風俗習慣を、幼い心にしげんに染み込ませ、  
 かわいなおともだちと思ひ馴らさせたい…”と説か  
 れています。冒頭頁の地図には日本（本土・朝鮮半  
 島・台湾・千島・国後も）は赤で、準日本は色分け  
 して、他を黒塗りに。国策での満蒙開拓団の家族や  
 椰子にのぼる子やアオザイを着る人々もゴム林で働  
 く子もカハイイ トモダチということを強調。

写真4 「アシナミ ソロエテ」文部省推薦 “お



▲写真4 「アシナミ ソロエテ」 二葉書房 ウタ 与田準一 エ 茂田井武  
 作曲 森義八郎 日本放送協会選定



▲写真5 「桃太郎」 柴野民三文 新井五郎画 2万部発行 30銭

国の進んで行く方向に、お互いの足なみをそろへ：どのような困苦がこようとも力強く：心の快活さで乗り切りませう。”と全編の詩に曲がついて楽譜付き。作者の精一杯の工夫で絵も語も楽しげだ。

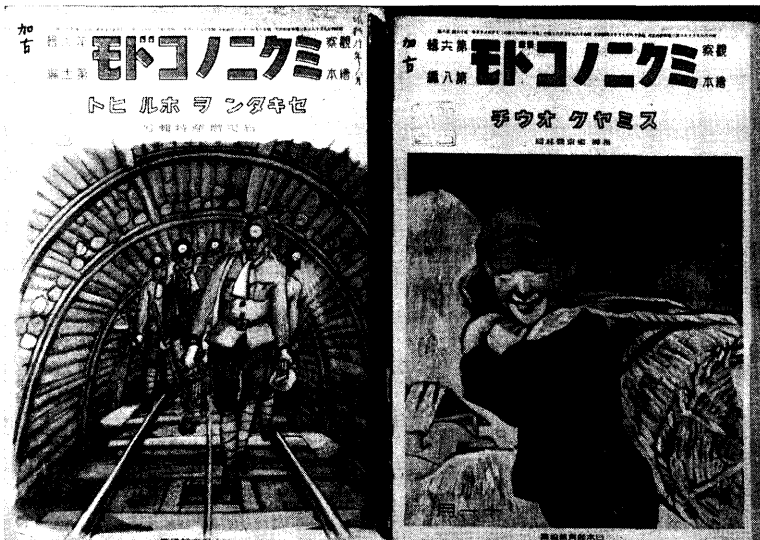
写真5「桃太郎」十八年五月 物語の筋は同じだが、今や大東亜戦争の勃発とともに、我々はあくまでも勝ち抜く決意に燃えて：お伴の犬猿雉は智仁勇を表徴するものであり：米英アングロサクソン族の赤鬼青鬼共を撃滅する桃太郎こそ、真に時局下適正なる出版：”とあります。“鬼畜米英”はすでに合言葉に。話の意味づけは聖戦路線です。

写真6ミクニノコドモ「スミヤク オウチ」「セキタンヲ ホルヒト」十八年十月・十九年一月 敵性語としてキンダーブックを改題、保育関連合併によりフレールベル館を廃し日本保育社。いずれにも解説は、軍需省や大政翼賛会などが、勝ち抜く為に“を標榜。“戦力増強の上で大切な資源で：皇祖より

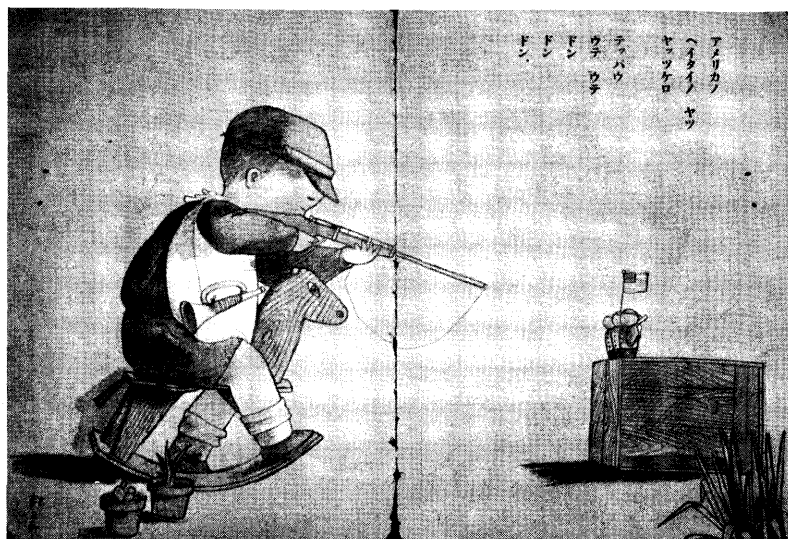
うけついで尊い国土に皇宗の御陵威の下に代々：や  
がて我々の頭上に来る輝かしい勝利を待とう：”と  
あります。保育教材も例外ではなかった。

写真7「パウヤハ ヨイコ」十九年七月 当時、  
学童から幼児までが、親元を離れて山漁村へ疎開し  
た時期です。全編銃後の心得。進軍ラツパを下げ、  
肩章や勲章をつけ、戦闘帽をかぶって敵兵を狙う姿  
は異様な緊張の顔つきに描かれています。

日本ノコードモ「ヒノマル」二十年一月は戦中最後  
の一冊。巻頭に「ハツヒノデ 日本ノヒカリ トウ  
アラテラス」とあり、全頁に日の丸が描かれてい  
る。センシャヘイニナリタイ・ヒコウキデスヨ・ミ  
ナミノゼンセンニオフネガ：等続く。藁半紙のよう  
な紙でインクのにりが悪く、裏表紙に日の丸を刻ん  
だパズルがあるが、ぼろぼろで使えなかった。日の  
丸に表徴されるのは、大日本帝国。必ず神風が吹  
く”を信じていた子等に日の丸を切り刻むパズルと



▲写真6 観察絵本 ミクニノドモ 16-8号「スミヤク オウチ」  
16-11号「セキタンラ ホルヒト」 日本保育社 35銭



▲写真7 「パウヤハ ヨイコ」(坊やが良い子) 佐藤義美文 荒木龍三郎画

精華堂 5万部 35銭\*外地5銭

は何だったのか。

何時の時代のどの戦争でも、自国にとつては聖戦であり、止むをえない正当とした理由があるものです。しかし、一国の発展は相手国には侵略であり、そのための情報管理・思想統制が不可欠。差し当たつて日本に戦争の動きはありませんが(忍び寄る影あり)、地球上には悲惨な状況が今も諸処に起こっています。九九年八月国旗国歌法成立! 国旗のもとに散つた多くの生命があつたことを考え合わせる。

幼い心は何色にでも染められます。必要な情報が選べない状況や国防色に偏向した文化財ばかりを子どもに与える社会の愚かさは、もうゴメンです。自ら調べ読み、自ら考えて選び分けていく力を子どもたちに培いたいものです。

(子どもの文化研究所)

# 子育ての探究 その五

## 鎌倉・室町時代における子育て

柴崎 正行

鎌倉・室町時代における子育てについて探究するた  
めに、まずは中世の女性史から調べてみた。それでわ  
かったことは、この十数年の間に女性史が随分研究さ  
れていることであつた。女性史の源流は高群逸枝の  
『日本婚姻史』（至文堂 一九六三年）であるといわれ

ているが、女性史総合研究会編『日本女性史』全五巻  
（東大出版会 一九八二年）、脇田晴子他編『日本女性

史』（吉川弘文館 一九八七年）、脇田晴子『日本中世  
女性史の研究』（東大出版会 一九九二年）、そして田  
端泰子『日本中世の社会と女性』（吉川弘文館 一九九  
八年）というように、次々とその研究成果が発刊され  
ている。

今回はこうした中世女性史を中心にして、鎌倉・室  
町時代という戦乱の時代において、子育てがどのよう



に変化していったのかを探究したいと思う。

### 武士階層における女性の地位の変化

平安時代の社会は貴族、武士、農民（庶民）という三つの階層が形成された時代でもあった。このうち貴族階層と庶民階層の子育てについては、すでに述べたところである。

貴族階層においては男子中心の官職の世襲制が成立し、官職は男性によって独占されるようになった。そのため、貴族階層においては、男性の寵愛を受け後継者を産む女性と、産まれた子を育てる女性という役割の分離が成立し、乳母という育児を担当する女性の職業が成立した。

また庶民階層においては農業が中心の家族労働であったが、当時の絵巻物からは子どもの世話は多くの場合に母親や祖母などの女性が行っている姿が描かれていた。そのことから、子どもは家族の中でも主に手

の空いた女性が担っており、乳母というような仕組みは広がっていなかったと思われる。

それでは平安時代に成立した武士という階層においては、女性はどのような立場におかれていたのであるか。まずはその点から調べてみた。

武士の世界というと男性中心の世界であり、女性は家を守るという印象が強いが、鎌倉時代までは土地や地位を男性と同等に保持できていたことが明らかにされている。例えば、女性であっても親から領地や地頭職を譲与された場合には、鎌倉幕府はそれを安堵したという証文が残されている（注1）。鎌倉後期までは地頭職の知行や地位をめぐっては、武士階級の男女間に明確な差はなかったという。

もし夫が地頭職についている場合には、夫が留守の間はその妻が代わりに最高責任者となって所領を知行し、家内を管掌していたという。その意味で武士階級の娘は、女房として幕府に宮仕えをした後に、婚姻し

て地頭の妻となり家をしつかり管掌することが、理想的な生き方であつたらしい。そのために家の所領をしつかり管掌する妻のことを、次第に女房というようになつたという。その意味では現在では妻一般をさして女房と呼ぶのは適当な表現ではないのかも知れない。

こうした男女の対等性は下級武士層でも存在し、財産の相続においては男女差をつけないことが慣行であつた。女性も親の財産を相続する権利を持ち、それを売買譲与する権利もあつた。しかしそうした地位と権利を弱体化していった要因は、鎌倉時代にみられた母子同居から夫婦同居へという家族関係の変化であつたというから（注2）、不思議なものである。

平安時代はまだ夫婦別居、母子同居が普通であつた。親族としては母と子が一番近い存在であつた。しかし鎌倉時代になると、男が女のもとに嫁ぐ婿入り婚と、女が男のもとに嫁ぐ嫁入り婚が共に行われるよう

になり、後期になるほど嫁入り婚が増えていくという。こうして鎌倉時代には、それまでの通い婚から次第に同居婚が一般的になつていった。同居することによつて財産が次第に合一され共同知行されるようになり、それが夫婦共同の財産から家の財産として変化していったのである。そのことによつて家を代表する夫の管理下に妻の財産も組み込まれるようになり、結果的に女性の財産の相続権を奪つていったという（注3）。

こうして女が男の家に嫁ぎ同居するという婚姻形式が一般化していくにつれて、女性は妻としての地位につくことにより地頭職などの地位や財産相続権は失つていき、夫の代理人としての役割を果たすようになっていった。

### 武士階級の子育て

武家社会は血族集団としてのイエをどう守りどう発

展させるかというイエ社会の結合を基盤にして成り

立っていた。そのために婚姻はイエとイエとを結び付ける目的で行われることが多かった。武家にとつては娘はイエとイエを結び付けるための大事な道具となっていたのである。合戦となった場合には、婚姻によつて結び付いたイエ集団が武士団としてひとつのまとまりを形成して戦った。したがって戦いに勝つためには、より多くの姻戚関係を形成しておく必要性があつたのである。こうした婚姻による姻戚関係によつてイエ集団を形成するという発想は、現在でも企業などでは生きている場合がある。

そしてこうした姻戚関係を形成するためには、娘はできるだけ多くの子を産むことが求められた。また産んだ子の養育を自分で行うことはなく、貴族階層と同じようにすべて乳母に任せていた。しかし武士階層の乳母には、貴族階層の乳母とは異なる役割があつたという。それは戦になつた場合には、乳母の一族が味方

についたことである。

たとえば源頼朝には寒川尼、山内尼、摩々尼、比企尼という四人の乳母がいたが、その一族によつて保護されて生き延びたし、また木曾義仲は三歳の時に父親が殺され、乳母の夫である中三権主兼遠によつて木曾で養育された。こうして乳母は養育するだけでなく、一族を挙げて味方につく関係でもあつた。それは権力者の乳母になり、その子を養育すればその乳母一族の所領が安堵されることを意味していたという(注4)。そのために武家にとつては自分の妻や娘を誰の乳母として出向させるかが、大きな問題となつたのである。このように上級武士階層にとつて乳母関係は、姻戚関係とならんで、イエの存続と発展にとつて欠か



せない手段となつたのである。

こうして武家社会の子育てにおいて、女子は姻戚関係を形成するための道具として女房になるためのしつけをほどこされるようになったし、男子はわが家の後継ぎとしての読み書き計算する力を授ける必要性が生じてきたのである。戦国時代や江戸時代になると、それぞれの武士団が国や藩を形成し藩校を設立して教育をおこなつた。だがまだ鎌倉時代にはこうした武士階層に特有の学校は足利学校を除いてはなく、仏教寺院に預けて読み書き算を習わせたという(注5)。十四世紀に描かれた絵巻物には、寺院で学ぶ武士の子弟の姿が数多くみられる(注6)。武士階層の親たちは知り合いの仏教寺院にわが子を託したわけであるが、歩ける距離であれば通学させ遠ければ預けて、数年間にわたつて基本的な読み書き算を学ばせたようである。それもこれも将来は支配者として年貢を計量して徴収し、必要に応じて証文や手紙を書けるようにするた

めであつた。こうして武士階層においても貴族階層と同じく、男子の子育てにおいては識字教育が実施されていたのである。

### 商工業における女性の地位とその生活

鎌倉・室町時代の子育てにとつてもうひとつの大きな社会的変化としては、商工業が発展し手工業や小売商が商売として成立したことがあげられよう。農業を中心とした自給自足的経済が中心であつた鎌倉時代においては、こうした手工業者は中央や地方の豪族の邸宅内で保護を受けながら生産していた。しかし戦乱が続いた室町時代になると、城下町などに居を移して自立的に生産するようになった。そのために自分たちの利益を守るために同業者同士でギルド型の座を形成し、その技術を家職として独占的に継承するようになった。こうして家職としての手工業が成立したのである。そうした職種としては、鍛冶屋、材木屋、屋根

葺き、番匠、桶屋、酒屋などがよくみられた(注7)。

これに対して、餅売り、豆腐売り、扇売り、帯売り、白布売り、酒売りといった小売り商の多くは女性であったという(注8)。現在でも、製造業や木工業そして大工などの建設業では圧倒的に男性が多いし、デパートやスーパーの売り子は圧倒的に女性が多いが、こうした男女間の分業体制はすでに商工業の成立した時期からみられる特徴であったことがわかる。この時期にこうした分業制が成立した要因としては、近畿地方などにおいて庶民の女性はそれまでの自給自足的経済を抜け出し、多彩な経済活動に進出するようになったのではないかという指摘がなされている(注9)。

鎌倉時代から室町時代にかけて成立した職人を網羅した職人尽絵に「七十一番職人歌合」とよばれるものがあるが(注10)、それを見ると職種によってどのようにならぬ男女で分業されていたかがよくわかる。女性の職人が描かれているものに、縫い物、扇売り、酒づく

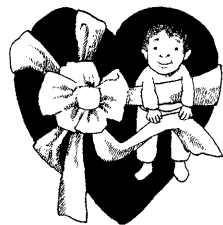
り、大原女、餅売りなどがあり、男性が描かれているものに、番匠、傘はり、紙すき、瓦やき、鎧細工、弓づくり、鍛冶などがある。

こうして中世を通して商工業階層が成立し、女性はその中で重要な位置を占めるようになったのである。それは武士階層で女性が姻戚関係を築くために道具化されていたのとは違って、女性も自己実現ができる新たな職業の発見でもあったともいえる。

### 商工業者の子育て

こうした商工業階層における子育ては、どのようなものであったろう。前回も紹介した絵巻物には、こうした商工業者の姿も描かれており、そこから子育ての様子が垣間見ることができる。

例えば十四世紀初頭に描か



れた「春日権現験記絵」には、建築現場にたくさん  
 番匠と共にそれを手伝ったり、そばで遊んでいる子ど  
 もたちが描かれており（注11）、仕事場に子どもたち  
 （男の子）を連れて行ったことがわかる。また十五世  
 紀に描かれた「福富草紙」には、京都七条の餅屋の様  
 子が書き込まれている（注12）。それを見ると、餅や  
 団子を並べた見世から母親と小さな女の子が幸せそう  
 な表情で外の通りに身を乗り出しており、家で餅や団  
 子売りながら子育てをしていたことがわかる。この  
 ように商工業者の子育ては、基本的には現在の工務店  
 や商店とほぼ同じであったことが、絵巻物からは想像  
 できる。

（東京家政大学）

注

1 田端泰子『日本中世の社会と女性』吉川弘文館 一九九八

年 七八頁

2 田端泰子 前掲書 一四八頁

3 田端泰子 前掲書 一九八頁

4 脇田晴子他『日本女性史』吉川弘文館 一九八七年 七四頁

5 上 笙一郎『日本子育て物語』筑摩書房 一九九一年 一

三四頁

6 黒田日出男『絵巻 子どもの登場』河出書房新社 一九八

九年 六六頁

7 田端泰子 前掲書 三一八頁

8 女性史総合研究会編『日本女性史 第二巻』東大出版会

一九八二年 一六四頁

9 女性史総合研究会 前掲書 一六五頁

10 毎日新聞社編 復元の日本史『説話絵巻―庶民の世界―』

毎日新聞社 一九九一年 一一六頁

11 黒田日出男 前掲書 三九頁

12 毎日新聞社 前掲書 八〇頁

# 幼児の教育 第九十八卷 (平成十一年) 総目録

## ◇一号

ある日

巻頭言 今、保育で必要なことは何か

高杉 自子

震災後の子どもたち(21) おとなと出会う

ということ

森末 哲朗

「児童の世紀」を振り返る―その十一―

本田 和子

幼児期―排泄とアイデンティティを

考える―

津守 真

子ども時代と私(14) いのち恵まれて

上坂元 一人

続・『ポケットモンスター』考

山本 政人

ユーゴスラビアを訪ねて

入江 礼子

ある日の育児日記から(97)

佐藤 和代

自分を確かめる

田中三保子

## ◇二号

巻頭言 「生きる力」と知識・技術

小川 剛

子どもの生活と音楽(6) 「府中離子」を

演じる子どもたち 藤田美美子

子どもと本の豊かな出会いを願って

田中 久徳

子育ての心理(4) 活力ある子を育てる

楡木 満生

現代人のライフプラン 津守 真

子育て文化史のなかの「伝統」と

「近代」 太田 素子

人とかかわる力を育むために

斉藤 史江

ドイツ、おもちゃの王国 美谷島いく子

子育てと母親 山口 美和

ある日の育児日記から(98) 佐藤 和代

## ◇三号

ある日

巻頭言 望ましい保育施設の在り方を

考える

森上 史朗

ある日の育児日記から(99)

佐藤 和代

「観る」という行為に潜んでいた私の

感情

田代 和美

ある秋の午後

中村 妙子

「児童の世紀」を振り返る―その十二―

本田 和子

幼児期にのぞみ見るものは生涯に

つながる

津守 真

歴史の中の保育に学ぶ(一) 志賀志那人の

大阪北市民館保育組合から 福元真由美

子どものいる暮らし

単身赴任者の子育て便り 岩立志津夫

過去と現在の間 山本 政人

遊びへの関わり 高橋 陽子

## ◇四号

ある日

巻頭言 母親

外山滋比古

子育ての探究その一 親は子どもに愛情

を感じていなかったのか 柴崎 正行

保育現場からの現代幼児論(1)

幼児の攻撃性 友定 啓子

子ども時代と私(15) 赤いランドセル

島田 淳子

研究者と保育者とのあいだ 津守 真

コミュニケーション能力を考える(1)

葛藤をへて分かち合う心 村松 賢一

風と子どもたちと 前田志津子

保育的課題へのまなざし(1)―友達関係の

生成をめぐって 戸田 雅美

二十五年ぶりの教育実習―イギリス公立

幼稚園保育参加顛末(5)―豊田 一秀

子どもの本から しまのずれたとら

大沢 啓子

◇五号

歴史の中の保育に学ぶ(二) 賀川豊彦の

光の園保育組合から 福元真由美

子どものいる暮らし 子どもとの生活で

感じるこゝろ 園田 雅文

「児童の世紀」を振り返る―その十三―

本田 和子

A夫とのひとときを通して考えたこと

榎田 正子

「泣く子ども」の助け手

津守 真

毎日の食事で健全な幼児を育む

吉田企世子

幼稚園の日々 子どもが出会い集う

ところ 樋口早百合・無藤 隆

世紀末のコミュニケーション山本 政人

子どもの心に思いをよせて三題 田村 英子

保育の本から『まごころの保育』を

読んで 笹原 裕子

◇六号

巻頭言 親にとつての子どもの価値と

子どもの教育 柏木 恵子

特集(支える)

江戸庶民の生活を支えた近郊農村

波多野 純

意識を留めて心を流す 杉田多可雄

ともに揺れる ブランコ 鍋島 恵美

骨に支えられて 酒井 朋子

「小金井かいわい」の二年 佐藤 和代

アフリカで 榎田 英郎

自閉症の子どもに特別な保育はあるか

津守 真

コミュニケーション能力を考える(2)

「きく」ことから始まる 村松 賢一

保育現場からの現代幼児論(2)

幼児の攻撃性 友定 啓子

子育ての探究その二 飛鳥・奈良時代の

の古典に描かれた親子像 柴崎 正行

◇七号

巻頭言 保育者の暖かさ 千羽喜代子

子どものつばやきが意味するもの

小山 節子

子ども同士の育ち合い・教師同士の

育ち合い 竹田 好美

図書紹介 ダニエル・J・ウオルシュ他著

『文脈の中での子どももの研究―理論、

方法、倫理』 津守 真



子ども時代と私(16)

過去が教えてくれるもの 野田 幸江  
「児童の世紀」を振り返る―その十四―

子どもものいる暮らし 私の言い分 中島 隆  
本田 和子

歴史の中の保育に学ぶ(三) 橋詰せみ郎の  
家なき幼稚園から 福元真由美

特撮・アニメ今昔―『機動戦士ガンダム』  
シリーズ考 山本 政人

子どもの本から 仲 明子  
「いのち」ってなんだろう

◇八号

全部自分のものになりたい心 津守 真  
特集(緑蔭図書紹介)

「とつときのとつかえっこ」

上垣内伸子  
「障害者を障害者と思わない」こと

「消費者教育のすすめ」 松原 洋子  
馬場 由子

「愛の妖精」と『銀の匙』 渡辺 純一

幼稚園の日々 たたずむ場、休む時

樋口早百合・無藤 隆  
保育現場からの現代幼児論(3)

攻撃的感情を治める 友定 啓子  
コミュニケーション能力を考える(3)

日本語の開国とコミュニケーション  
教育 村松 賢一

子育ての探究その三 平安京の親子像 柴崎 正行

震災後の子どもたち(22) 震災から  
四年目のあれこれ 上崎 温子

◇九号

生活者としての子どもたち 伊集院理子  
巻頭言 過去の彼方に何を望むか

「児童の世紀」を振り返る―その十五―

高橋さやか  
『いるかだより』で織り上げたにじ色の  
いるか織り 本田 和子

新山 裕之  
実践と理論のあいだに(1)

公式理論と内潜理論 田中 平八

子どもものいる暮らし

ラ ヴィータ エ ベッタ 戸田 功  
癒しと教育 津守 真

子ども時代と私(17) ャナニカ・ドコカ  
変々を覚えるとき 加古 明子

環境を見つめ直す 永井 三亮  
心理学は人間が「わかる」か 山本 政人

空爆下 ユーゴスラビアからのEメール  
入江 礼子

◇十号

巻頭言 欠乏から渴望へ 間藤 侑  
保育現場からの現代幼児論(4)

イノセンスの表明 友定 啓子  
実践と理論のあいだに(2)

公式理論と内潜理論 田中 平八  
教育対談の前後 津守 真

特集(つなぐ・つながる)  
おたんじょうび おめでと

永田 陽子  
全国をつなぐ「黄柳野高校PTA」

森 清光

あたりまえ

河村 治夫

開発途上国での想いを帰国後も

前田美知子

編集者「つなぐ」雑記

伊集院郁夫

「つなぐ」「つながる」

加々美勝久

五人の仲間

吉岡 晶子

◇十一号

巻頭言 自由保育は学級崩壊の元凶か

秋山 和夫

老若男女共同参画社会の子育てを

見渡す(1) 性をこえ世代をこえて

子育てにかかわる 金田 利子

震災後の子どもたち(23)

子どもが子どもを育てる 森末 哲朗

「児童の世紀」を振り返る―その十六―

本田 和子

私が幼児教育を志した頃(1)

子どものいる暮らし

子どもは体にいらしい 田中 泰行

子育ての探究その四 絵画資料からみた

平安時代の庶民の親子像 柴崎 正行

〇くんの「こわい」でいっぱい

尾形 節子

幼稚園の中の未就園児クラスたんぼ組

大沢 啓子

◇十二号

保育現場からの現代幼児論(5)

戦いごっこ

友定 啓子

子ども時代と私(18) 三つの思い出

佐々木久春

鯨岡峻著『両義性の発達心理学』を

読んで

浜口 順子

私が幼児教育を志した頃(2) 津守 真

幼稚園の日々 二人が力を合わせて

樋口早百合・無藤 隆

保育者の眼差し―続・担任という視線

矢萩 恭子

国防色はもうゴメン 加古 明子

子育ての探究その五 鎌倉・室町時代に

おける子育て

柴崎 正行

幼児の教育 第九十八巻(平成十一年)

総目録

### 幼児の教育

第九十八巻 第十二号

(一九九九年十二月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年十二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚三丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目

株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六―一四―九

〒〇三―一五三―九五―一六六―〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

漫画でつづる

好評  
発売中

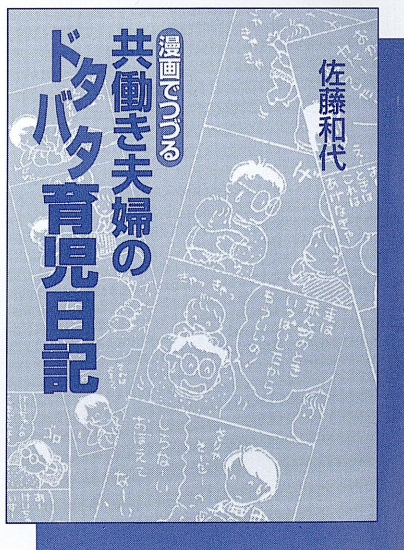
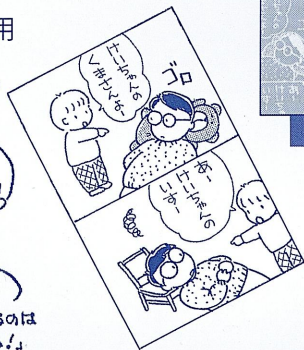
# 共働き夫婦の ドタバタ育児日記

個人的な育児にまつわるできごとが、子育て奮闘中のお母さん方の笑いと共感をおよぼすのびのび育児日記。

保育者にも、育児中の母親がどんなことに喜び、不安を感じるのかがわかり、母親対応のコツがつかめる本として活用できます。



このごろよく言われるのは「お姉ちゃんをっくりね。」



実家に行くと、必ず柱に傷をつけて背比べ。



湯どうろの上で、おどろカッソアツ!

佐藤和代 著

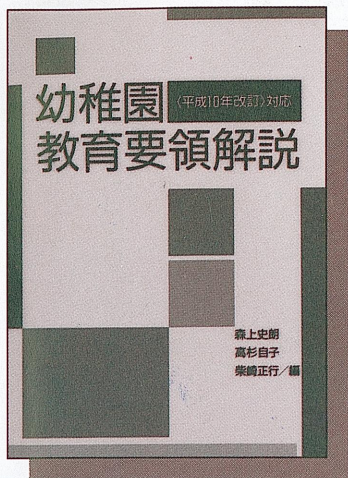
B6変型判 208頁 定価：本体1,200円+税

キダーブックの  
フレーベル館

平成10年改訂対応

# 幼稚園教育要領解説

付録 平成10年改訂・幼稚園教育要領全文



好評発売中

平成10年に改訂され、来年度(12年)より実施される新「幼稚園教育要領」をより深く理解するための、教育要領解説書の決定版！  
第一線の研究者・保育者が結集し、理論・実践の両面から、新教育要領を総合的に解説します。

## [主な内容]

- **第一章 幼稚園教育要領はどのように変わってきたか**  
—元年から10年までの子どもを取り巻く環境の変化と、改訂までの概略—
- **第二章 幼稚園教育の考え方の基本**  
—平成元年教育要領の基本を解説—
- **第三章 幼稚園教育の充実と発展(10年改訂のポイント)**  
—元年教育要領との相違点を詳しく解説し、新教育要領がめざすものを、くっきりと浮かび上がらせて—
- **第四章 幼稚園教育要領の内容**  
—教育要領の組立て、子どもの生活と遊び、各領域の意味と相互関係について、詳しく解説します—
- **第五章 幼稚園教育を計画し実践するために**  
—指導計画作成のための考え方の基本を詳説します—
- **第六章 教師の役割**  
—10年改訂で強調された“教師の役割”のポイントについて詳説します—
- **第七章 幼稚園運営の弾力化**  
—これからの幼稚園運営の方向を明らかにします—

森上史朗 高杉自子 柴崎正行／編著

A5判・並製・カバー付・288頁・定価：本体1,600円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**